

令和元年度 全国体力・運動能力、運動習慣等調査の結果について

1 調査実施概要

(1) 対象学年

- ・小学校第5学年、特別支援学校小学部第5学年
- ・中学校第2学年、特別支援学校中学部第2学年

(2) 調査の内容

① 児童生徒に対する調査

ア 実技調査 (小学校、中学校ともに8種目で実施
小学校は20mシャトルラン、中学校は持久走と20mシャトルラン
から選択)

体力テスト種目	単位	体力要素	測定
① 握力	kg	筋力	左右握力の平均値
② 上体起こし	回	筋パワー ・筋持久力	30秒間に上体を起こした回数
③ 長座体前屈	cm	柔軟性	長座位で前屈したときの両手の前方への移動距離
④ 反復横とび	点	敏捷性	20秒間に両脚で左右側方に反復跳躍した回数
⑤-1 持久走	秒	全身持久力 ・長距離走能力	男子1500m、女子1000m の走行時間
⑤-2 20mシャトルラン	回	全身持久力	20m走行の折り返し回数
⑥ 50m走	秒	疾走能力	50mの疾走時間
⑦ 立ち幅とび	cm	筋パワー ・跳躍能力	両脚で前方へ跳躍した直線距離
⑧ ソフトボール投げ ・ハンドボール投げ	m	巧緻性 ・投球能力	ソフトボールを遠投した距離(小学校) ・ハンドボール2号を遠投した距離(中学校)
体力合計点	点	8種目の体力テスト成績を1点から10点に得点化して総和した体力テスト合計得点	
総合評価	5段階	8種目の体力テストをすべて実施した場合、体力テスト合計得点の良い方からABCDEの5段階で評定した体力の総合評価	

イ 質問紙調査 (運動習慣、生活習慣等に関する質問紙調査)

② 学校に対する質問紙調査 (子どもの体力向上に係る取組等に関する質問紙調査)

③ 教育委員会に対する質問紙調査 (子どもの体力向上に係る施策等に関する質問紙調査)

(3) 調査実施期間

平成31年4月から令和元年7月末まで

(4) 本県の調査学校数(公立学校)・児童生徒数

	学校総数	調査実施校数	標本数
■公立小学校	233	233	13,610 (男:6,876 女:6,634)
■公立中学校	111	111	12,039 (男:6,224 女:5,815)

2 調査結果の概要

(1) 体力・運動能力調査

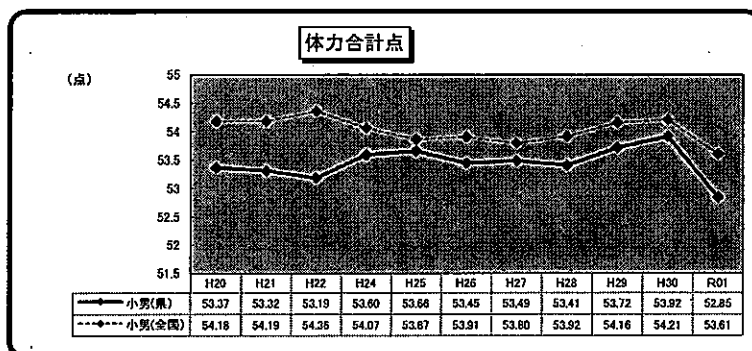
○調査結果のポイント

- ア 小学校の体力合計点は、男女ともに全国平均値を依然として下回っている。
 イ 中学校の体力合計点は、男子は全国平均値を上回り、女子は全国平均値を下回った。
 ウ 昨年度の体力合計点と比較すると、小・中学生の男女ともに低下した。特に小学生男子は過去最低値であった。全国平均値も同様の結果となっている。

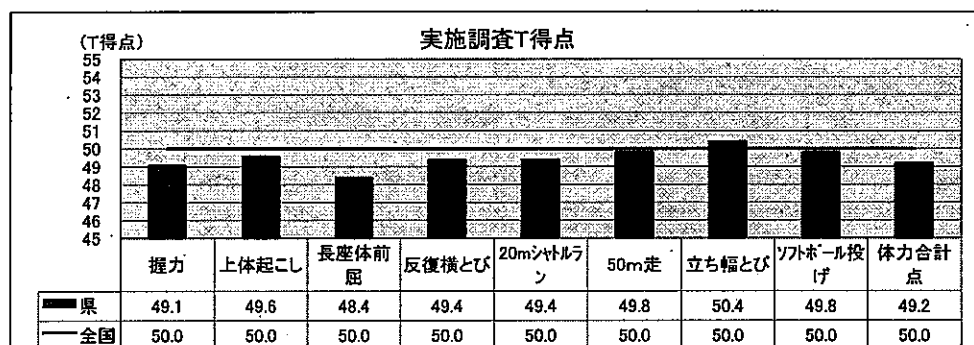
①県の体力合計点の推移(全国公立学校との比較)

【小学校5年男子 体力合計点】

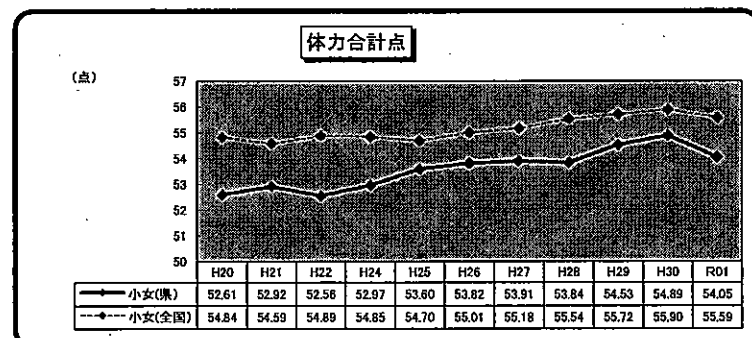
T得点 全国平均値に対する相対的な位置を示し、単位や標準偏差が異なる調査結果を比較するもの。平均値50点。



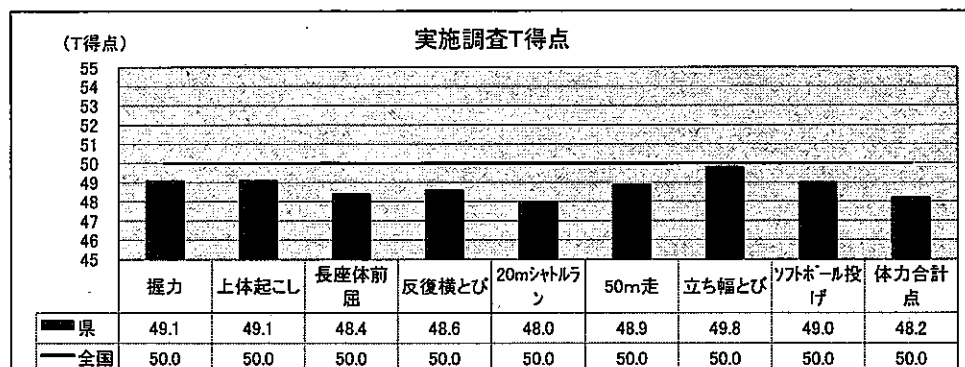
- 体力合計点は全国平均値を0.76点下回り、過去最低値の結果となった。
 ○立ち幅とびは全国平均値を上回った。



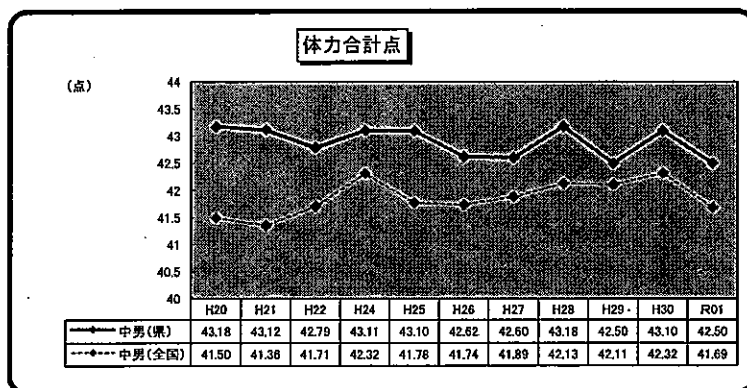
【小学校5年女子 体力合計点】



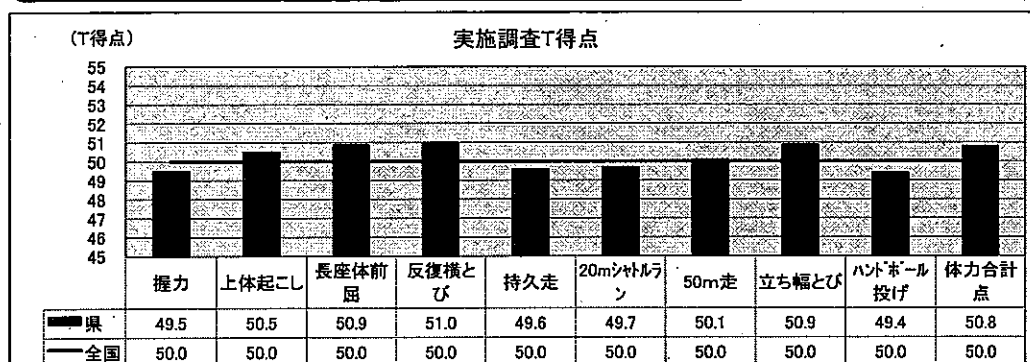
- 体力合計点は全国平均値を1.54点下回った。
 ○すべての種目で、全国平均値を下回った。



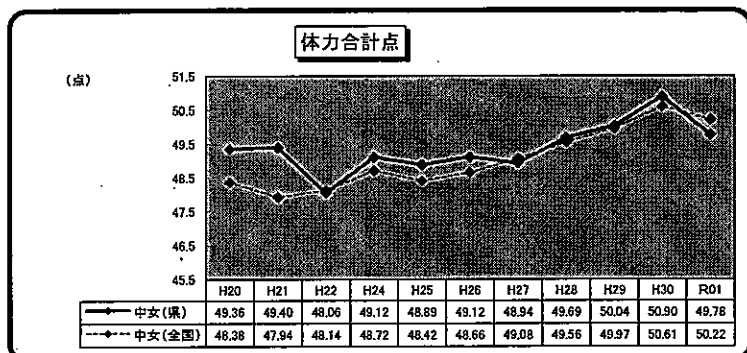
【中学校2年男子 体力合計点】



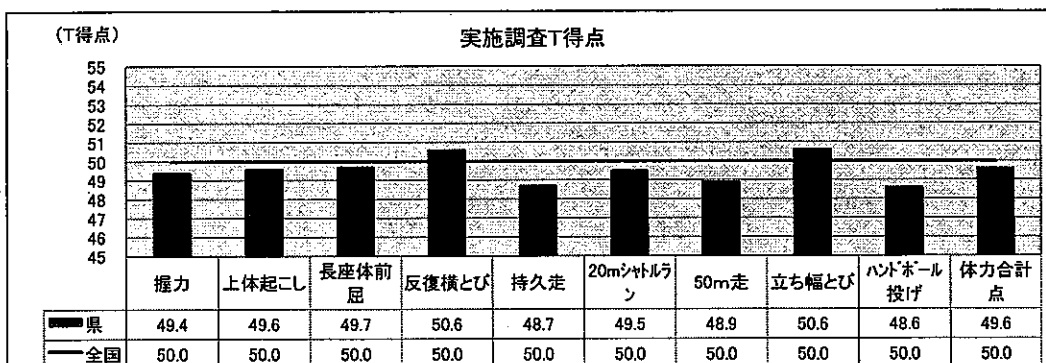
○体力合計点は全国平均値を0.81点上回った。
○反復横とび、50m走、立ち幅とび、上体起こし、長座体前屈の5種目で全国平均値を上回った。



【中学校2年女子 体力合計点】



○体力合計点は全国平均値を0.44点下回った。
○反復横とびと立ち幅とびの2種目で、全国平均値を上回った。



(2) 運動習慣等調査（資料編 p 9～p17）

① 小学校

<児童質問紙>

○運動・スポーツに対する意識および習慣について（※「運動」は体を動かす遊びを含む）

- ・「運動やスポーツをすることが好き」と回答した割合が、男女とも全国平均値を下回っている。
- ・「運動やスポーツは大切」と回答した割合が、男女ともに全国平均値を上回っている。
- ・1週間の総運動時間は、男女とも昨年度と比較して減った。全国平均値と比較すると、男子は上回ったが、女子は下回っている。
- ・小5男女ともにスクリーンタイムが増加しており、長ければ長いほど体力合計点が低い傾向がある。

○体育の授業に対する意識について

- ・「体育の授業が楽しい」や「体育の授業で学んだことを授業以外のときにも行ってみようと思う」と回答した割合が、男女ともに全国平均値を下回っている。
- ・「授業のはじめに目標が示されている」や「授業の最後に学んだ内容を振り返る活動を行っている」と回答した割合が、男女ともに全国平均値を上回っている。

<学校質問紙>

○カリキュラムマネジメントの視点

- ・「体育、保健体育の授業以外で、全ての児童生徒の体力・運動能力の向上に係る取組（H30年度）」の項目で、「行った」と回答した割合が全国平均値を下回っている。

○授業改善の視点

- ・「調査結果を踏まえた授業等の工夫・改善」について「行った」と回答した学校の割合が全国平均値を下回っている。

② 中学校

<生徒質問紙>

○運動・スポーツに対する意識および習慣について

- ・「運動やスポーツをすることが好き」と回答した割合が、男女とも全国平均値を下回っている。
- ・「運動やスポーツは大切」と回答した割合が、男女ともに全国平均値を下回っている。
- ・学校の運動部活動に所属している割合が、男女ともに全国平均値を上回っている。
- ・1週間の総運動時間は、男女とも昨年度と比較して減った。全国平均値と比較すると、男子は上回ったが、女子は下回っている。

○保健体育の授業に対する意識について

- ・「保健体育の授業が楽しい」、「体育の授業で学んだことを授業以外のときにも行ってみようと思う」と回答した割合が、男女ともに全国平均値を下回っている。特に女子は、「あまり楽しくない」と回答している割合が高い。
- ・「授業のはじめに目標が示されている」や「授業の最後に学んだ内容を振り返る活動を行っている」と回答した割合が、男女ともに全国平均値を上回っている。

<学校質問紙>

○カリキュラムマネジメントの視点

- ・「運動・スポーツが苦手（嫌い）な傾向にある児童生徒向けの取組、または性別に応じ

た取組の実施」について「行っている」と回答した学校の割合が、全国平均値を上回っている。

- ・「調査結果を踏まえた年間指導計画の改善」について、「反映した」と回答した学校の割合が全国よりも低い。

○授業改善の視点

- ・「調査結果を踏まえた授業等の工夫・改善」について「行った」と回答した学校の割合が全国平均値を下回っている。

3 調査結果から見える成果と課題

(1) 小学校

- ・多くの学校で、体育の授業以外での年間を通した体力・運動能力の向上策を進めていることが、男子の1週間の総運動時間が全国平均を上回ることにつながった。
- ・児童質問紙の「できないことができるようになったきっかけ」の項目において、「授業中に先生に個別にコツやポイントを教えてもらった」や「友達に教えてもらった」と回答する児童の割合が全国平均値を上回っていることから「できる」ことを意識した授業が行われている状況である。
- ・「運動やスポーツをすることが好き」、「体育の授業が楽しい」や「体育の授業で学んだことを授業以外のときにも行ってみようと思う」と回答した割合が、男女ともに全国平均値を下回っていることから運動やスポーツへの愛好的態度や主体的に取り組む態度が十分に育っていない。
- ・「運動やスポーツは大切」と回答した割合が、男女ともに全国平均値を上回っているものの体育の授業でたくさん体を動かしていると回答した児童が少ないことから、授業において十分に体を動かすための授業改善が必要である。

(2) 中学校

- ・保健体育の授業において、生徒に本時の授業を理解させるため、目標を示したり、学習したことを振り返ったりするなどの授業改善が見られる。
- ・運動やスポーツが苦手な生徒でも、保健体育の授業の中に「助け合う活動」や「話し合う活動」による生徒同士の関わりから「できる」「わかる」と実感できるような授業改善が必要である。
- ・女子においては、「保健体育の授業があまり楽しくない」と答えた生徒が男子と比べて多いことから授業を含め様々な要因を分析し、改善を図ることが必要である。

4 課題に対する今後の改善への取組

(1) 運動・スポーツへの愛好的態度を育てる取組

- 「体育が苦手な児童生徒のための授業づくり」だけでなく、どの児童生徒にも体育の授業をきっかけに運動への愛好的態度を育むことを重視した授業改善など教員の指導力向上を目的とした研修会を実施する。
- 「運動やスポーツをすることが好き」や「体育の授業は楽しい」と回答した児童生徒は、体力の合計得点が高いことから、各学校の分析シートを作成し、児童生徒の実態把握をしてもらうとともに、運動やスポーツへの愛好的態度を育めるよう、外部人材を活用した校内研修会の実施や授業について推進する。

(2) カリキュラムマネジメントの取組

- ・「本調査を踏まえた年間指導計画の改善」に「反映した」と回答する学校の割合が全国と比較して低いことから、各学校の児童生徒の実態を踏まえた具体的な目標を設定し、小学校では「新体力テスト 新・分析支援システム」の活用やチャレンジランキ

ングの推進、中学校では「PDCAカード」による体力向上を図る。

- ・小学校の女子においては、1週間の総運動時間が420分を下回ることから、1週間の総運動時間が420分以上確保できるよう促す。
- ・中学校では、生徒自身が「できる」もしくは「わかる」ようになったと実感できたり、多様な運動やスポーツの楽しみ方を学べたりできるように、先進地の授業実践事例を研究し、開発した授業モデルを学校へ提供し、実践してもらう研修会を実施する。

(3) 体育科・保健体育科の授業改善に向けた取組

- ・小・中学校において、「体育の授業が楽しい」と回答する児童生徒は、「やや楽しい」までを含めると9割程度の児童生徒が体育の授業に好意的である。しかし、「体育の授業が楽しい」と回答する児童生徒は体力合計点が高いことから「楽しい」と回答しなかった児童生徒が「楽しい」と回答するような授業改善を図る。
- ・体育科・保健体育科の授業において十分に体を動かしていると回答している児童生徒の割合が、全国平均値と比較して低いので、運動量を重視した体育の授業の組み立てを図る。
- ・小学校においては、「本調査結果を踏まえた授業等の工夫・改善」に「行った」と回答する学校の割合（40.8%）が昨年度（48.0%）と比較して低いので、研修会等において教員の意識を変えていけるよう取り組む。

(4) 家庭・地域と連携した取組

- 保護者用情報誌「教育しが」において本調査結果を掲載する。また、各学校の通信等で保護者、地域への情報発信（運動紹介）を行い、家庭や地域での運動遊びの推進に努める。
- スクリーンタイムと体力合計点に相関関係があることから保護者と連携を図り、問題意識を共有する。